

子どもを本当に見ると言うこと



異年齢実践報告会の子どもたちの動画を観た後、「(クラスで飼っている)メダカが死んでいたの、早く埋めた方がいいですよ…とアドバイスをしたことは、余計なことでしたね〜」と、おっしゃった保護者の方がいました。

それは、動画の子ども達が、浮いているメダカを見て、「メダカは、水の中に住んでいるから、水のお墓を作ってあげようよ!」というシーンがあったからでした。動画は続いて、「水のお墓、どうだったのかな?」と、子ども達の話し合いのシーンへ。

「メダカが白くなった」

「臭いにおいがする…このままだと、お部屋も臭くなるかも?」

「水のお墓はかわいそうかも」と、意見が出た後、

「やっぱり、土に埋めた方がいい」と自分たちで水から土のお墓へと方向転換したのでした。

保護者の方がおっしゃっていた『余計なこと』とは、私たち保育者が今、まさに実感していることでした。

腐ると白くなる・ふわふわして水に浮く・臭いにおい…。

五感を通して実感し、子ども達が考え、決定していく過程を、私たち保育者はいつの間にか「早く知ってほしい」「早く気づいてほしい」という大人からみた一方的な正解を、無意識に導いて、実感するチャンスを奪っていたのかも知れないと思うようになりました。

それは、大きい子ども達だけではなく、1階の小さな子ども達にも同じことがいえ、今まで見ていた子どもが違って見えるようになってきました。そこで、小さい子にも保育者の予想と違ってやりたいことがあることに気づき、その時間を保障し、遊びこめる空間を作り、環境を工夫することを大切にする取り組みをはじめました。

●フックに掛けたい!!



左の写真は、1歳クラスのS君です。

壁のフックに自分でお玉を掛けたいのです。

けれども、小さなフックにお玉の穴を合わせるのは至難の業です。

やっている途中で何度もかんしゃくを起こしました。大人が手伝ってあげるのは、簡単です。けれども何日も挑戦するうちに、お玉をフックに掛けられるようになりました。



うまく掛けられたときの笑顔は、何ともいえない表情。出来るようになると、フライパン→チェーンへと、掛けるものが変化していきました。掛けることがクラスで小さなブームになったので、フックの数を増やすため、窓にも貼りました。けれども、



窓のフックは、なぜか人気がありません(笑)

子どもは、今、自分の体のどこを、育てたらよいのか、ちゃんとわかっているのかもしれませんが。

●水ってなんだろう？



上の写真は、はらっぱ組の S くん。(1 歳)

テラスで水遊びをするために、たらいに水を張るのを手伝っている途中のこと。ホースから出てくる水に気づき、それどころではなくなっていました。ホースの先に親指を入れ、抜いたら人差し指を差し込み、差し込みすぎたら水しぶきが上がり、自分に水がかかってしまい、びっくりする時もありました。けれども、そんなことにかまっている暇はないという様子。



その隣では、いちご組の K くんがたらいの中に入って、必死になって足踏みをしています。

小さく足踏みをするより、強く足踏みをしたほうが、高く水しぶきが上がることに気づいたのか、だんだんと足踏みがダイナミックになっていきます。水が自分の顔にかかると、保育者をちらっと見て、「すごいでしょ？！」と言わんばかり。

子ども達は、それぞれの方法を使って、水とはどんな性質の物か？を研究しているようでした。

●音調べ？



0歳室には、ペットボトルにお米とどんぐりが入っている手作り玩具があります。

Hくんがいち早く、それを振ると音が出ることに気づき、気に入ってあそんでいたのも、ペットボトルの中身を変えてみたら、Hくんの興味はどんな風に変化していくのだろうか？と保育者は思い、写真のような多種類の中身のペットボトルを用意してみました。



1本1本の音を確認、振るたびに音が違っていたり、腕に伝わる振動がちがっていたりします。それを確認しながら、選ばれたペットボトルは、なぜかビーズ。

その楽しみ方に魅せられて、他の子どもだんだんに興味を示すようになってきたところです。

3つの子どもたちの姿からもわかるように、小さい子達は、日々、瞬間瞬間、多くのことを学んでいるように思います。

一人ひとりの子ども達が、何に反応しているのか？

この子の興味はどこにあるのだろうか？

そこを複数の保育者が多面的に推測して「〇〇ちゃんの興味を、どうやって深めたり、広げたりしたらよいのだろうか」ということを、3～5歳の異年齢の子どもたちのドキュメンテーションから0・1・2歳児クラス担任へと伝播しているところです。

『いたずらしている』だけのように見える姿も実は、知的な探求を行っているのかもしれない。

わたしたちは、そこに大切な意味があるかもしれないと考えるようになってきました。

小さな時から『学びの世界を育む』ということを大切にしたいと考えています。